



発行

財団法人東京都市生涯学習文化財団

東京都埋蔵文化財センター

〒206-0033

多摩市落合1-14-2

☎ 042-373-5296

たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No. 47

平成11年10月30日

http://www.tef.or.jp/maibun/



出来た、できた！
上手に焼けて完成だ！

昼の星

所長 浅野 秀治

数年前のことになるが、あるシンポジウムで聞いた「昼の星」という話をまだ記憶している。昼でも星は輝いている。見えないのは太陽の光に遮られているからだ。昼でも暗い井戸の底から見上げれば星が見えるはずだという話である。経済価値のような量的に測り易いものと比べ、文化や芸術のような精神的価値は、見ようとしなければ分からないということを「昼の星」に例えたのである。

埋蔵文化財も「昼の星」と言える。地下に眠っているため、発掘しない限り私たちの目に触れることはない。しかし、数百年から数千年前の先人たちの営みのしるしが確かに存在するのである。そんなものは飯の種にならないという人もあろうが、学術文化の視点から見れば経済価値に換算できない「宝の山」でもある。

パリ、ローマ、イスタンブール、西安、京都など、多くの観光客が訪れる魅力的な都市は、例外なく自らの歴史を誇りにしている。活発な都市活動を続けながら同時に史跡や遺物を大切にし、それらが見事に調和した都市に私たちは感動すら覚える。

地道な発掘調査により歴史が書き変えられることもある。経済価値に換算することは困難にしても、先人の残した貴重な文化遺産に光をあて、後の世代に継承していくことが私たちの使命である。

遺跡だより ⑤⑤



武蔵国分寺跡遺跡北方地区

西国分寺分室では、「旧国鉄中央鉄

道学園跡地」内（敷地面積22万234㎡）の約5万8千㎡を、平成7年から10年までの4年間で発掘調査しました。

その結果、赤土の中から石器1万3千610点、礫3千877点、合計1万7千487点の膨大な旧石器時代の資料が検出されました。

今回は、この中から5点の資料が接合したナイフ形石器を紹介します。この石器は、調査区の東側の野川に向かう浅い谷部に位置する遺物集中部から出土しました。

出土層位は、立川ローム第IV層上部（約1万7千〜8千年前）です。集中部の構成点数は954点、そのうち945点（99%）が黒曜石で、613点（64%）が碎片（最大長1cm以下の剥片類）です。

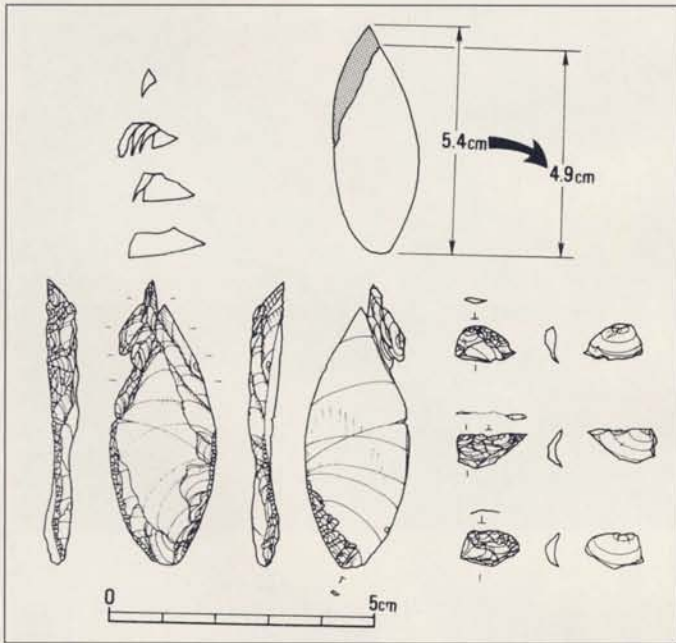
このことから、本集中部では黒曜石の石器製作とともに主として細部調整加工がなされたと推測されます。

この二つに折れた黒曜石のナイフ形石器は、先端部付近に3点の調整加工碎片が重なって接合しました。

1点目は、先端から1cm付近で、調整を加えて幅が3mm減少しています。2点目は、同じ様な場所を叩いて鋭く尖らせた先端部を含む部分が剥離され、石器自体の長さが2mm減少しています。そして3点目は、さらに同じ場所を叩き、側縁部分を調整しています。

一般的には、接合した調整加工碎片は、打面部分が線状をなし、頭部に微細な剥離痕が集中し、縦断面が「し」の字状を呈するのが特徴的です。

このナイフ形石器は、最終的には調整加工碎片が接合している場所から約1.5cm下の器体中央部付近を調整加工中に、加工の衝撃により本体が二分するような破損が生じて廃棄されたものと考えられます。さらに、このナイフ



蛍光X線分析により長野県小深沢産の黒曜石と推定

形石器を詳しくみると、一連の調整加工で手を加えたのは正面左側縁部分の先端から2cmの部分であり、結果的には全体の大きさが約1割ほど減少しただけで、平面の形状も石器自体の長軸もほとんど変化していません。

最初の碎片が剥離される以前の平面先端角度は約55度で、最終的な先端角度とほぼ同じです。加工中破損するような危険性を犯してまで、何故このような調整加工を施さなければならなかったのか？

強いて違いを挙げれば、加工前には側面の先端角度が35度だったのが、

加工後には45度になったことでしうか。しかし、これも一般的には「ナイフ形石器の先端部は刺突という機能が考えられる」「刺突には、先端角度の大きい（鈍い）ものより角度の小さい（鋭い）物の方が有利である」という現在考えられる観点からは、理解し難い変更です。

遺跡から壊れた石器が出土すると、「作っている時や、使っている時に壊れた」と単純に解釈されがちです。しかし、小さな資料を丹念に接合することにより、うっかりすると見過ごしてしまうような指の爪より小さい碎片類が、当時の人々の石器製作の鍵を握っていることがわかります。発掘調査では目を皿のようにして検出し、室内整理ではピンセットを用いて根気よくつなぎ合わせる。この二つの作業が結びついて、今まで窺い知ることのできなかった新たな情報が得られます。

このナイフ形石器に調整加工碎片が3点重なって接合した例は、日本で最初かも知れません。また、同じ石器集中部からは、ナイフ形石器未製品（剥片素材）と両面体尖頭器未製品（石核素材）の接合例もあります。整理作業が進むにつれて、さらに新たな情報や発見が得られることと思えます。（五十嵐 彰）

上屋敷庭園内の池跡

現在、汐留遺跡では仙台藩伊達家上屋敷内の庭園跡を調査中です。調査区内では大小の池跡が重層的に見られ、この庭園は池を中心にして何度か造り替えられていたことが分かります。ここでは特に庭園内の大池に関して、絵画史料を頼りにその年代上の位置を大まかに見ていくことにします。

文化財講座 <37>
大江戸掘りもの帖 ~ 十四 ~

発見された大池は長さ約90m、幅約35mですが、護岸の石積みが所々二重、三重に廻っており、造り替えが明らかです。特に西側部分は縮小・改築の痕跡が顕著で、最終的にこの大池は長さ約68m、幅約35mに縮小されたようです。仮に、縮小以前の大池を遺構A、最終的な姿のそれを遺構Bと呼びますと、遺構Bには、「滝」や「流れ」それに「中島」や数ヶ所の「渡り橋」もあつたことが確認されていますが、遺構Aがいつの頃か縮小されて遺構Bになったというわけです。

さて、仙台市内の旧家に「伊達家芝上屋敷絵図」という史料が残され

ていましたが、そこに描かれた庭園内の大池は規模・形状ともに遺構Aにそっくりです。この絵図は享保19(1734)年から天明4(1784)年頃の屋敷内を描いたものと言われていることから、遺構Aは18世紀代、それ以前の遺構ということになります。伊達屋敷は延宝4(1676)年に下屋敷から上屋敷になる時、屋敷地を海手側に拡張しますが、遺構Aの範囲はその拡張部分にまで及んでおり、最初の築造年代も延宝4年を遡らないということとなります。



江戸藩邸芝口上屋敷庭園図

庭園を描いたもう一つの史料に

「江戸藩邸芝口上屋敷庭園図」(図参照)があります。これは仙台出身の絵師菊田伊洲(1791~1852)が描いたもので、庭園には「築山」や「中島」それに数ヶ所の「渡り橋」などがあつたことが分かります。平面形を描いたものではないので不明な部分もありますが、「中島」や三ヶ所の「渡り橋」の位置は遺構Bに付帯して検出

保存科学室(ぼれ話(十二))

出土遺物にみられる

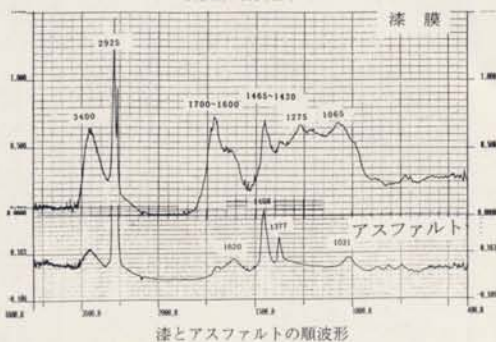
黒色物質について(1)

遺跡から出土する土器や木製品に付着している黒色物質には、漆やアスファルトなどがあることが知られてきています。これらの有機化合物は、加熱すると容易に変質し、燃焼すると黒い炭(C)になります。

出土遺物にみられる黒色物質は、置かれた土中環境で、材質の腐敗、劣化、溶出、剥落がおこり、もとの状態が失われる上に、使用中に受けた熱の影響で炭化に近い状態にもなります。これらの有機質材料を同定するには、フーリエ変換



フーリエ変換赤外分光計 (FTIR)



漆とアスファルトの順波形

赤外線分光法 (FTIR) があります。これは資料に赤外線を照射して、その吸収波長から物質の構造を解析する方法で、有機物質の同定には極めて有効です。今後しばらく、FTIRによる素材の同定を紹介いたします。(門倉武夫)

された位置とピッタリと一致しました。

このように、遺構Aと遺構Bは近世絵画に描かれた内容と一致するという発掘史上まれに見る調査例として、私たちの目の前に姿を現したのです。遺構Bの築造年代は菊田伊洲が活躍した19世紀前半を中心として、遡っても18世紀末頃と考えられます。(福田敏一)

文化財講演会

平成11年度の文化財講演会は、展示テーマ「土と木と炎と」に合わせ、古代、丘陵の生産活動に関連した内容で企画しました。

第一回は7月7日(水)に、当センターの及川良彦副主任調査研究員による「土 土器の原料―時代で変わる粘土の掘り方―」の講演と、映画「埼玉の瓦職人」を上映しました。104名の参加がありました。

第二回は、9月4日(土)。都内遺跡調査会の松原典明氏が、「炎 馬の絵のある窯」の演題で昨年ウマの線刻画の発見で話題になりました瓦谷戸窯跡群の調査の模様を講演し、映画は「古代史の発掘」を上映しました。68名の参加がありました。

第三回は、10月2日(土)。鳩山町教育委員会の渡辺一氏による「炎 古代の焼き物―むさしの国の須恵器生産を中心として―」の講演と、鳩山町教育委員会の製作映画「よみがえる須恵器のむら」を上映しました。90名の参加がありました。

縄文土器作り教室

8月19日(木)20日(金)に土器製作、9月11日(土)に野焼きという、3日間の日程で行われました。



汐留遺跡の見学風景

親子81組、一般86名、計167名という多数の応募者の中から、今年はいく例年より多い10組の親子を含む、39名の方が参加され、見事な土器ができて上がりました。
野焼きの日には、焼石による煮炊きや、古代米の竹炊飯等、新しい試みも行われました。
当日の様子は、巻頭写真にて推測ください。

汐留遺跡の現地説明会

仙台藩伊達家上屋敷庭園跡の現地説明会を7月3日(土)に開催しました。

当日は、雨が降り続くあいにくの天候の中での説明会となりました。雨水が庭園の池に溜まり、当時の様相が再現されましたが、足元は泥々のぬかるみとなってしまいました。

しかし、それにもかかわらず熱心な見学者が1100名もあり、庭園跡や出土遺物の展示、泥メンコの型抜きなどの行事に参加されました。

安全標語

7月1日は国民安全の日であり、全国安全週間の初日ですが、当センターの創立記念日でもあります。そこで毎年安全標語を募集していますが、今年の第1席には、藤原恵美子氏の作品が選ばれました。

もう一度 初心に返って

要チェック!

当日は、瀧沢延彦医師による「健康と生活習慣」の講演が行われました。

研究活動への助成

平成11年度の職員研究助成(個人研究)が決定しました。

鶴間正昭 「古代金属器模倣土器の研究」

多摩ニュータウンNo.72遺跡
現地説明会

日時 11月17日(水)
13時~15時

(小雨決行)

場所 多摩ニュータウンNo.72遺跡
京王相模原線「堀之内」下車
徒歩10分

内容 古代・縄文中期の集落跡

計報

調査研究部課長補佐千野裕道氏(48歳)は、7月27日、バキスタンにて、高山病のため急逝されました。慎んで哀悼の意を表します。

人のうごき

8月16日付けで、鈴木雅久所長が多摩教育事務所へ転出し、後任には出納長室より浅野秀治が着任しました。

また、10月1日付けで、調査研究部係長に甲崎光彦が就任しました。



古紙100%配合の再生紙
を使用しています。